

発行日 2010年2月20日 (隔月20日発行) 通巻279号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報誌
トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial & Error

No.279

March-April 2010

特集

隣人との出会いを積み重ねた十年
『南北コリアと日本のともだち展』を振り返る



Japan International Volunteer Center

■日本から送られてきたメッセージをけんめいに読むチャンギョ小学校の子どもたち。

隣人との出会いを積み重ねた十年

『南北 코리아 と日本のともだち展』を振り返る



JVC もスタート当初から関わっている日本と朝鮮半島の子どもたちの絵画交流『南北 코리아 と日本のともだち展』が始まったのは2001年。政治レベルではいまだに歴史的なわだかまりを解決できず困難な状況が続いている“隣人”同士だが、昨年には日朝韓の子どもたちが「平和の木」を描きあげるなど、『ともだち展』は着実に子どもたちの出会いと交流の場をつくってきた。10年目を迎える今年、関わってきた方々にこれまでを振り返ってもらおうとともに、今後を展望してもらった。(編集部)

呼びかけ人

『ともだち展』が開く世界

津田塾大学学芸学部国際関係学科教授

林哲 リン チョル



専門は国際関係学、東アジア国際政治、東アジア国際関係史。子供のとき、朝鮮戦争の際に難民として家族とともに渡日。『ともだち展』に賛同し、呼びかけ人を務めている。

■ 転機を迎えた絵画展

日本と韓国の代表的なNGOの協力のもと、「アンニョン・チングヤ(こんにちは、おともだち)」と銘打った日本と南北朝鮮、在日の民族学校の小学生たちの絵画展『南北 코리아 と日本のともだち展』が始まって、もう十年が経つという。機会がある度に拝見し主催者の話にも接してきたが、ここ数年の間に諸国の政治的な困難さの中で開かれた〇九年は、この絵画展が新しい転機に立っているように感じられた。展覧会自体は言うまでもなく、絵の指導や収集に携わった絵本作家の田島征三さんや韓国からのゲストではあり絵本作家の柳在守(リウ・ジュンウ)さんらを迎えてのトークイベントでのお話と、その会場での参加者との応答がかもし出す大変に和やかな真摯な雰囲気から、活動の発展と交流の充実化、つまりコミュニ

ケーションの質の深化が伺えたからである。二十一世紀に入って、南北首脳会談という一瞬の曙光も束の間、なお冷戦的な対立から抜け出せない南北朝鮮、と同時に真の和解を達成していない日本と南北朝鮮の関係を、自然体で考えあう機会が実感できたとも言える。

■ 子どもたちを主人公に

今日、国際政治という学問分野においても、NGOの存在やその意義・機能については研究や調査が進められている。日本でもその活躍は広く知られてきているが、国際政治やハードな安全保障につながる分野、とりわけ冷戦対立や植民地支配時代の影響下にある分野でのNGO活動として私が注目したのは、韓国の「オリニオッケドム」の活動である。なかでも『ともだち展』は、政治的敵対という課題に対する追求・克服につな

がる方法論として興味深い。

オリニオッケドムは、九六年六月にハンギョレ統一文化財団などにより韓国ソウルで設立されたNGOである。「肩を組み合う友だち」を意味する名前も魅力的だが、その活動は、南北に分かれた体制下にある子どもたちを統一した地でもともに生きてゆく「主人公」と位置づけ、互いに交流・協力できる実践の機会を提供することによって成熟した市民に成長してもらうことに主眼が置かれている。

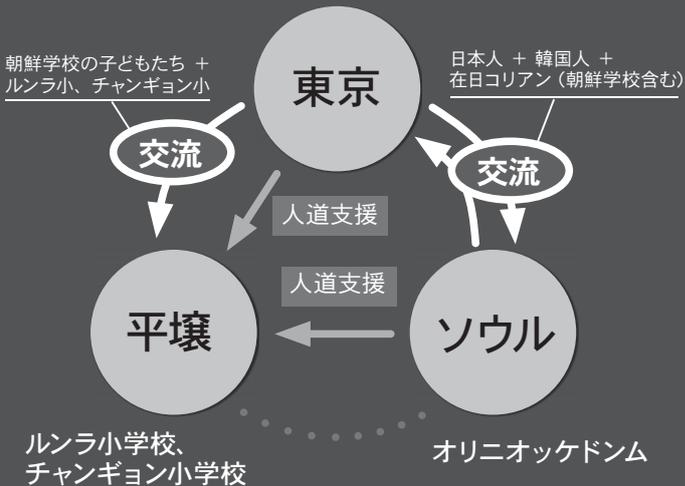
和解・協力の主人公とする」として当初提示されたこのアイデアが、どれほど新鮮なものであったことが、極度に敵対していた南北関係を、「政治の問題」から平和の構築を目指す「子どもたちの交流と和解の文脈」へと移し変えたのである。

■ 和解の実践の場として

この目的を実現するために、彼らは諸般の文化・教育・交流事業を継続的に展開することを掲げ、その活動は日本との相互理解を市民レベルで深めていく運動につながられていった。それが『ともだち展』に見られる交流・協力の発展なのである。

現代国際関係の最重要な課題の一つは、分断・敵対した地域や人々の「Reconciliation (和解)」という問題であるが、この『南北 코리아 と日本のともだち展』は、まさにその和解の実践のひとつに他ならない。

『南北 코리아 と日本のともだち展』 実行委員会



支援から始まって交流へ

人道支援と「KOREA こどもキャンペーン」

95年に北朝鮮で起こった水害支援に対し、日本の市民団体が緊急救援に取り組んだが、そのうちのひとつとして「KOREA こどもキャンペーン」の前身が結成された(当時5団体が参加)。96年に新潟から船で米を支援したのを皮切りに、継続的に支援と現地訪問を行ってきた。01年には協同農場の託児所に太陽光発電パネルを設置した。近年では、07年に洪水被災地支援を実施した。現在の参加団体は、アユス、地球の木、JVCの3団体。

日朝両国の世論悪化や日本の経済制裁で支援が困難になる中で、01年からは絵画展(下記)を支援活動と同時並行に開催、その事務局も担っている。

『南北 코리아 と日本のともだち展』

01年より実行委員会形式で開催している、日本と朝鮮、韓国に暮らす子どもの絵画展。実際には行き来の難しいこの地域の子どもたちが、絵とメッセージの交換を通して「出会う」ことを目的としている。「できることから始めよう」とスタートした相互訪問では、日朝・日韓間を行き来した子どもたちはのべ168名にのぼる。現在の実行委員会は、アユス、北朝鮮人道支援の会、KOREA こどもキャンペーン、在日コリアン青年連合、在日本韓国YMCA、地球の木、日本キリスト教協議会、JVC、ピースボートの9団体で構成。

当初から韓国側のパートナーである「オリニオッケドム」は、96年に結成された。北の子どもへの支援と文化交流、平和教育を活動の柱としている。物資の支援だけでなく、平壤では豆乳工場や文房具工場の建設や医科大学小児病棟の改築も手がけてきた。韓国国内では、北朝鮮への理解をすすめる平和教育からスタートして多文化共生のプログラムを学校などで実践。団体名には、背の高さと心の高さを同じくして「肩を組み合える友だち(=オッケドム)」になるうとの意味が込められている。

朝鮮側では、受け入れ団体である朝鮮対外文化連絡協会を通じて、小学校から絵を提供してもらっている。スタート時から協力してくれている平壤市ルンラ小学校では02年より絵画展を開催してきたが、日朝関係の悪化により07年からは交流会のみを行なっている。

実行委員会

『南北 코리아 と日本のともだち展』 実行委員会
筒井 由紀子



九七年より北朝鮮人道支援の事業に関わり、年に一、二度現地を訪問しながら、子どもへの人道支援活動および交流事業を続けている。消費者運動が母体となったNGO「地球の木」事務局長を兼任。

■期待の中でのスタート

私たちが住む北東アジアでは、二十一世紀に入ってもなお、平和への道筋が見えない状態が続いている。北朝鮮への人道支援を行なってきたNGOが集まり、今なお「近くて遠い国」である日本と韓国、北朝鮮の子

どもたちの相互理解を図ろうと〇一年に始まった『南北 코리아 と日本のともだち展』は、今年で十年目を迎える。

二〇〇〇年、歴史的な南北首脳会談が行なわれ、朝鮮半島は新しい時代への扉を開いた。『ともだち展』はその大きな流れにも支えられ、実際には一堂

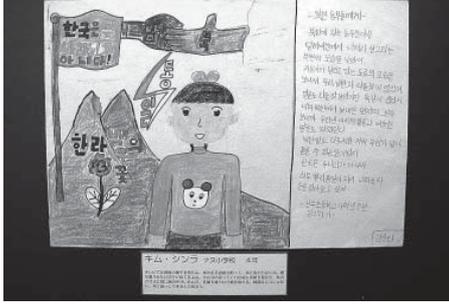
に会すことの難しい日本・韓国・北朝鮮に暮らす子どもたちが「絵を通して出会う」という画期的な取り組みとして、大きな盛り上がりを見せた。日・韓では、子どもたちの交流も始まり、北朝鮮では、代表(当時)の三木睦子さんのご尽力で、平壤市ルンラ小学校の先生にも

『ともだち展』は、今年で十年目を迎える。

■「拉致問題」以降の暗転

ところが、〇二年の小泉首相(当時)訪朝により日本側の状況は一変する。日本全体が「拉致問題」の渦に巻き込まれ、い

理解を得て、「不可能」と言われていた北朝鮮での絵画展開催も実現した。



■韓国 NGO オリニオックドームの行なっていた絵手紙の交換を知ったことから、『ともだち展』はスタートした。韓国の子ども「統一して早く手をつなぎたい」とのメッセージが込められている。



■支援をしている幼稚園から絵を受け取る。(01年黄海南道ウンパ郡)



■ルンラ小学校で日本の子どもたちにメッセージを書いてもらう。(03年)

わゆる「北朝鮮バッシング」がはじまった。人道支援はもとより、北朝鮮に関わることのほとんどが、街宣車の標的となったリメディアの集中砲火を浴びるような状況に陥った。「武力行使も辞さない」などという好戦的な言葉の応戦が先行し、ますます北朝鮮との対決状態を煽る世論が形成されていくことにも大きな不安を感じた。

戸惑う『ともだち展』の窮地を救ってくれたのは、韓国側のパートナーNGO「オリニオックドーム」であり、集中砲火をまともに受けたはずの朝鮮学校の子どもや先生をはじめとする在日コリアンの人たちであった。「今だからこそ、交流を続けなくては」という彼らとの協働を通して、私たちはこの『ともだち展』の意義を再確認すると同時に彼らから多くのことを学んだ。



■日本に住む子どもの味覚も変わった。「辛くて給食が食べられない!」から「韓国料理っておいしい!」へ。(03年)

「拉致」の事実は私たちにとても大変ショッキングなことではあったが、〇七年に新潟でのトークイベントに参加して平壤の様子を紹介した際、会場の外で、拉致被害者である曾我ひとみさんのお嬢さんに話しかけられました。とてもなつかしかったです」と言われた時は、ほっとすると同時に、とても勇気づけられた。

北朝鮮ではこの間、一緒に平壤を訪れる朝鮮学校の先生や子どもたちの協力もあって、訪問を重ねる度に、現地の小学校の先生や子どもたちとの関係が深まり、私たちの意図をしつかりとくみ取り、快く協力してくれるようになっていった。ルンラ小学校の校長先生は「平和を願う子どもたちの姿を日本にもっと知らせたいし、私たちにとても日本の子どもたちを知ると



■平城市トクソン小学校も『ともだち展』の参加学校のひとつ。日本の子どもの絵に先生方も興味津々。(04年)

でも貴重な機会です」と言い、ピクニックなどにも誘ってくださった。しかし、報道関係者を同行することも多いのに、この言葉や活動を紹介できないのが、今の日本の現状だ。加えて、昨年は北朝鮮による核開発やロケット発射があり、それに対して日本が独自の経済制裁措置をとったことで、北朝鮮でも対日批判の世論がさらに悪化し、絵画展に協力する平壤の小学校もまた、難しい立場に立たされている。平壤の小学校も私たちも、次の交流を心待ちにしていることだけは確かなのに、残念でならない。

■対話への道は開けるか
昨年夏のクリントン元大統領の訪朝から風向きは少し変わりはじめた。十二月にはボスワース米政府特使が訪朝し、オバマ政権になって初めての米朝協議



■川での水遊び。バーベキューもして、ルンラ小の子どもたちや先生方と楽しい時間を過ごした。(06年)

が行なわれた。米朝・南北もこれまでの対決姿勢から直接対話へと状況打開の道を模索しはじめている。これまで、米大統領の改選期になると、必ず周期的に動きを見せてきた朝鮮半島情勢。今こそ新たな展開を見せるのか、それに併せて日朝関係はどう動いていくのか、注意深く見守っていきたい。

この十年で集まった絵は二千点、日本・韓国・北朝鮮を行き来した子どもは百六十八名、交流ワークショップに参加した子どもはのべ千二百名を越える。状況は変わろうとも、たくさんの人たちが平和な未来を築きたいという共通の思いを抱いて参加した事実はゆるがない。対話や交流の積み重ねは、相互理解を深め、緊張から平和的解決への流れをつくる土台となり、不可能を可能に変える力へと必ずやつながっていくだろう。



■交流ワークショップでは、いっしょに遊んだり工作に取り組んだりして親交を深める。(07年)



■交流ワークショップとホームステイを通じて仲良くなったともだちと涙の別れ。(07年ソウル)



■朝鮮学校を初めて訪問したオリノッケドム。韓国人が朝鮮学校を訪問することは以前なら考えられなかった。(02年東京)



■オリノッケドムの絵画展は、いつもアイデアにあふれている。「平和の灯」は、和紙(韓紙)に描いた絵を明かりで照らしたものだ。(06年ソウル)

韓国 NGO

平和の木をともに描くことで 近づいた「平和な未来」

オリノッケドム事務総長

フアン ユンオク
黄允玉



■新たな出会いが開く未来

昨年十月に東京で開催された『ともだち展』には、南北、日本、そして在日韓国・朝鮮人の子どもたちがともに描いた「平和の木」が展示されました。この様子をNHKラジオの国際放送が取材してくれたのですが、

九九年の対北朝鮮人道支援のための日韓会議で、私たちは同じ思いを持つ日本の団体に出会いました。そして、〇一年の絵画展に絵を送って以来、毎年協働してきました。韓国にも「遠くの親戚より近くの他人」という諺ことわざがあります。行事に参加した子どもたちを見ていると、この諺を実感できます。韓国の子どもたちはみな、日本訪問ではホームステイがいちばん楽しい思い出だったと口を揃えて言います。寝食をともにしてみると、一晩だけのことなのに、幼い頃からよく知った仲であるかのように親しい友人になっ

■更なる展開に向けて

今年には朝鮮戦争が始まって六十年ですが、この戦争は法律上はいまだに「休戦中」です。『ともだち展』をともに築いてきたこの十年間も、「戦争を休んでいる」だけだったというのは、悲しくやりきれないことです。けれども、韓国人にとって南北首脳会談以前には想像もできなかった朝鮮学校訪問や、在日朝鮮人の子どもたちとの交流が、この行事を通して実現できたのも事実です。東京訪問の際に朝鮮学校の先生方が職員室で催してくれた手作りの歓迎会はとにかく感動的だったと今でもスタッフたちは話しています。

このように私たちの行事は、休戦を平和に変える、とても大切な役割を果たしうらと思っております。今後、オッケドムと絵画展実行委員会がすべきことは、さらに増えそうです。当初は南北関係を中心にして平和を語ってきましたが、これからはアジアさらには世界という視点から南北の問題と平和を見つめること、また活動の対象も子どもから青少年へと積極的に広げ、絵画展以外にも多様な出会いの場を設けなくてはなりません。互いの違いを共感へ、さらには違いを超えた平和の連帯をつくりていきたいものです。

「核問題に関する六カ国協議などとは別に、このような交流があることに驚いた。絵を通じた出会いによって相互理解に役立ててほしい」という声が寄せられたそうです。オリノッケドムと絵画展実行委員会が協力して毎年行なっている平和ワークショップと絵画展の意義が、アジアを越えて遠くエジプトまで通じたことに大きな喜びを感じています。

エジプトの方のおっしゃる「出会い」は、非常に重要なものです。南と北の子ども、日本

絵で出会い、友だちとなった子どもたちのたくさんの物語が、ひいては私たちの平和な未来を築くための大切な足場となります。これまでの十年に感謝するとともに、今年の新しい出会いが今から待ち遠しいです。



■ソウル市内の小学校を訪問。朝鮮学校の子どもたちが通訳をつとめてくれて、日本の子どもたちもひと安心。(04年)



■東京・平壤・ソウルの子どもたちの共同作品となった「平和の木」。(09年)



■ルンラ小の子どもたちに絵の指導をする金聖蘭先生。(〇五年)

朝鮮学校

東京・平壤・ソウルをつなぐ平和の心

朝鮮学校教員

キム ソンラン
金聖蘭



東京朝鮮第五初級中学校で美術教育に携わる。〇二年の『ともだち展』ソウル訪問に参加したほか、都下の朝鮮学校美術分科会の部長として、絵画提供や平壤訪問の引率などに長年協力している。

■朝鮮学校生徒の役割

いま、朝鮮学校に通っている子どもたちは日本で生まれ育つた三、四世です。その多くは、朝鮮学校に入って初めて朝鮮語を習い、朝鮮の文化や歴史について学びます。私はそんな彼らが、民族教育の中でこのびのびと成長し、民族の誇りと祖国への思いをしっかりと育んでほしいと思っています。祖国の分断は私たちが在日でも「朝鮮」と「韓国」に分かつという矛盾と葛藤をはらみ、近年の日本社会における「北朝鮮」への非難や中傷は、朝鮮学校の子どもたちの心に影を落としています。だからこそ、彼らが在日朝鮮人として自身の存在の意味を見つけ、自己表現をするさまざまな体験が必要なのです。

『ともだち展』との出会いによって、私は民族教育の中で育まれた彼らにこそ、日本と朝

鮮、韓国をつなげる役割があるのではと思うようになりまし。日本語と朝鮮語ができる彼らは、日韓の子どもの間で通訳をして交流の輪を広げるだけでなく、彼らの目線で平壤の子どもたちにもこの交流で出会った友人のことを伝え続けています。特に忘れがたいのは、朝鮮学校と平壤市ルンラ小学校の子どもたちが心通わせながら等身大の自画像を仕上げたことです。それを日本に持ち帰り、たくさんの人々に平壤の子どもの姿を伝えることができました。

■豊かなつながりが生む たくさんのお会い

『ともだち展』は、大人にとっても新しい出会いの場です。

日朝関係の厳しさからここ数年平壤での絵画展はできていませんが、学校訪問や交流に直接関わる朝鮮側の方々は、『ともだち展』の活動や在日朝

鮮人の役割を大変よく理解し励ましてくれます。毎年訪れるルンラ小・チャンギョン小の先生方は、毎回温かく迎えてくださり、作品づくりの依頼に快く応じてくれます。「よく来ましたね」とお会いするたびに抱きしめてくださるルンラ小学校のアン・オクボ校長。別れ際の空港で「来年もまた楽しい企画を待ってますよ！」と笑顔で見送ってくれた朝鮮対外文化連絡協会のキム・ミョンイルさん。私たち朝鮮学校の受け入れを二年連続して担当してくれたキム・ソンヒョクさんは、平壤でのことを日本に伝えるにはどうしたらよいか一緒に考えてくれる心強いパートナーです。

韓国のNGOオリニオツケドムとの出会いは、私にとって「もうひとつの祖国」の人々との出会いでした。初めてのソウル訪問後に、「平和ワークショップ」にやって来た朝鮮学校の生徒、先生たちを歓迎します。

(中略)南北分断ゆえに会うことが困難だった彼等との出会いがオツケドムムの新しい運動のはじまりになるでしょう」と紹介されたオツケドムム会報は、今も私の机に飾られています。

そして何よりも、日本人の方々との出会いがありました。平壤訪問や新潟展、さいたま展、福岡展など『ともだち展』に関わるたくさんの方々との友情を育むことができました。

十年の歩みを振り返ると、日本人と在日の私たちが手を取り合うことにより、朝鮮や韓国と豊かにつながってこられたという思いがします。東京・平壤・ソウルをリレーした共同制作「平和の木」は、まさに『ともだち展』を支える多くの人々の想いが結実した作品と言えます。今後もこうした作品がたくさん生まれ、多くの人の目に触れることを願ってやみません。

日本各地でも『ともだち展』!

『ともだち展』で集められた絵は、協力者のみなさんによってあちこちで巡回展示されています。イベントなどでの貸出も含めると、これまで全国でのべ70件の展示が行なわれました。

さいたま

塚田 悦子

(南北 코리아 と日本のともだち展 in さいたま)

「こんな場があってもいいよね」と7回目を数えたさいたま展。実行委員は東京展に絵を応募した子どもの親が中心で、それぞれのできること・やりたいことを持ち寄り企画をふくらませてきた。さいたま展の特徴は、絵の展示にとどまらず、韓国絵本を図書館から借用展示したり、民話や伝統音楽・楽器、仮面踊り、折り紙といった切り口で、来場者が五感で楽しめるような場づくりを心掛けてきたことか。

いや、なんといっても企画する私たち自身が、新しい出会い(魅力的な人や文化、歴史、とりわけ江戸時代の朝鮮通信使に象徴される日朝260年もの長い平和な関係の存在)を楽しみ、「もっと知りたい 코리아」と心弾ませてきたことが一番の特徴であり継続の原動力になってきたように思う。

「ボク、北朝鮮きらい!」「えっ、どうして? 君と同じおともだちが住んでるんだよ」折り紙をしながらのやり取りにはっとさせられる。タブー化され、何だかわからない不安な気持ちとして沈殿させられていく北朝鮮への意識。『ともだち展』はそんな空気にも風を入れ、私たちの言葉で考え語り合う場として、多くの地域に広がってほしいと心から願っている。



■トークイベントの司会をする塚田さん(左)。

新潟

金子 博昭

(南北 코리아 と新潟のともだち展 / びびんば会)

『南北 코리아 と新潟のともだち展』の初開催は03年12月。前年に地元での拉致が明らかとなり、憎しみの感情が頂点に達した時期だった。

「憎むことからは何も生まれない。こんな時こそ『顔の見える交流』を目指したい」と考えるメンバーが集まり、主催団体となる「びびんば会」を結成。朝鮮の混ぜご飯「ビビンバ」を念頭に、「日本と 코리아 の人が混ざり合って、おいしい味をつくり出せるように願っています」と、会の設立趣旨を掲げた。

以来、『ともだち展』の作品を借りての展示会は6回。子どもたちの絵は、さまざまな立場の人々を少しずつ歩み寄らせる媒介の役割を果たしてきた。

数年前まで「万景峰号」が日常的に往来し、食糧危機の際には支援活動も行なわれた新潟。拉致事件の影もある一方、朝鮮への親近感も一段と根強い土地柄だ。国交のない国と人間関係をひとつひとつつくる『ともだち展』の活動は、隣国とつながりたいと思う新潟の人々にも大きな示唆を与えている。



■平壤訪問にも同行して交流会をサポートした金子さん(後)。

長野

川越、千葉、小平、川崎、横浜、茅ヶ崎、相模原など

名古屋

京都

大阪

三重

神戸

下関

松山

高知

大分

福岡

パク テリョン

朴 泰竜 (南北 코리아 と福岡のともだち展)

福岡展のきっかけは、04年3月。福岡朝鮮初中級学校(現・福岡朝鮮初級学校)の卒業式に出席した際に、『ともだち展』を紹介していただいたことだった。以来、05年2月の第一回を皮切りにほぼ毎年開催している。実行委員会のメンバーは、学生・教員・自営業者・会社員ら20名ほど。年に一度の絵画展だけでなく、ホームページでの情報発信でも工夫を凝らしている。

『ともだち展』の絵は、在日朝鮮人のメンバーが小学校を訪問して朝鮮半島や在日朝鮮人のことを紹介する際の有効なツールのひとつとなった。福岡の子どもたちが描いた等身大自画像は、平壤やソウルからの絵とともに日本のあちこちを巡っている。プサンまで約200キロに位置するここ福岡で、いつか実際に子どもたちが会おう場をつくれたなら、これほど嬉しいことはない。



■等身大の自画像といっしょに写る朴さん(右端)。

日本での学びをラオスに。

JVC ラオス事務所 農業コーディネーター
フンパン・センチャントン

東南アジアの内陸国ラオスには多くの森が残っており、村の人たちは豊富な森を活かした暮らしを行なっています。しかし近年、化学肥料や農薬を使用した近代農業が入り始め、森も開発事業により減少しています。JVC ではこうした課題に対処するための活動を農村で実施してきました。

昨年、こうした活動をより良くするため、ラオス人スタッフのフンパンが、自然の資源を活かした有機農業の技術や農村リーダーとしての資質を学ぶための研修に参加しました。研修場所は、日本の栃木県にあるアジア学園。彼が得た学びの一部をご報告します。(編集部)



■多くの人々、体験、学び

〇九年四月から九カ月間、私は栃木県那須塩原のアジア学院で有機農業や農村におけるリーダーシップについて学びました。学んだ研修の総時間数は実に二千時間以上に上ります。そもそも、なぜアジア学院にて研修を受けようと思ったのかというと、研修の目的が農村部における草の根リーダーの育成と有機農業の実施だったからでした。私は農村地域における仕事に長年関わっており、今後も村の人たちの生活に貢献していくためにこの研修が欠かせないと思いました。大変貴重な機会をいただき、ご支援いただいた皆さまに感謝いたします。

研修では有機農業や良きリーダーとなるための技術を学び、そして英語も上達させたいと思っていました。ラオスの農村部の人たちが食べる物を確保し、自給できるようにすることが私の夢ですが、どうしてこのような夢を持っているのかというと、ラオスの村では米不足の問題や年々、化学肥料や農薬の使用が増えているといった問題があるからです。化学肥料や農薬を使わないで農業ができることを伝えたいと思っています。さらに、ラオスでは村人のみならず地方行政官とも一緒に活動

を行なっているのです、彼らにも伝えていきたいと思っています。

この九カ月、本当に様々なことがありました。アジア学院には多くの国々からの研修生やボランティアが集まってきており、文化、言葉、考え方も様々です。しかし、それでも私たちは一緒に楽しんで働き、暮らしていくことができるということ学びました。日本の言葉や文化、食事（特に味噌汁は私の好物となりました）、気候、中でも冬の季節到来はとも印象に残っています。寒いときには摂氏二度まで気温が下がり、初めて雪を見ました。また、ラオスには海は無いので、海も印象的でした。今でもアジア学院での日常の農作業などの活動や日本の近代的な建物、駅、沢山の人が懐かしいです。

アジア学院では内外の研修で多くのことを学びました。特に最初の三カ月は英語がほとんどわからず、講義を聞くにも苦勞しました。また、使っている地域の資材など、ラオスには無いものなどもあり、慣れるまで大変でした。学んだものとしては、野菜・作物栽培（品種ローテーション、土着菌を利用した有機堆肥、自然農薬、病害虫への予防方法、コンポストやぼかし、苗木作り、家畜飼育（鶏、ブタ、牛の育成

自然資源を利用した病気の防止、去勢方法、リーダーシップ（リーダー、内観、地域訪問など）といった技術、そして学院外研修の水俣、足尾銅山、大阪訪問があげられます。その他、時間管理の方法や化学物質の問題などについて学びました。

■改めて、村人とともに

学んだ研修をどうやってラオスの村の人たちへの活動に活かしていくか。まずはアジア学院で学んだことを元にサワナケットで活動しているJVCスタッフの仲間たちと話し合いたいと思います。協働している行政の考え方もありますし、JVCのポリシーもあり、村人の伝統的な知恵なども織り交ぜてアジア学院で学んだことを活かしていきたいと思っています。

アジア学院で学んだすべてのものをラオスで実施することはできませんが、その中でも活かせることを取り入れていきたいと思っています。先進国にも、良い点と悪い点があります。水俣病のような日本で起きた開発の問題や在来種が次第に失われつつあること、自給率が低いことなど、負の側面があることも伝えていきたいと思っています。そして、村人とともに少しずつでもよいので、将来への良い事例をつくっていききたいと思っています。



■研修先（京都）では学生とも議論を行なった。

アジア学院とは：

アジア学院は1973年に設立された国際人材養成機関です。アジア・アフリカなどの農村地域の民間開発団体（NGO）から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く“草の根”の農村開発従事者を学生として招き、自国のコミュニティの自立を共に目指す指導者を養成しています。

9ヵ月間にわたる研修では、栃木県那須塩原のキャンパスにおよそ30名の男女が集い、価値観等それぞれの違いを尊重し、公正で平和な社会実現のために、実践的な学びを行なっています。海外学生の渡航費、研修費は、ほぼ全額が、支援者の方々ならびに団体の寄付によってまかなわれています。



大柳 由紀子

（アジア学院職員 野菜・作物担当）

東京農業大学国際農業開発学科卒、九五年から九八年まで青年海外協力隊野菜隊員として西サモア（現サモア）に派遣、〇一年にアジア学院ボランティア、〇二年より同学院職員。



■研修先（埼玉）でのたまねぎ収穫の様子。

ファンパンさんのアジア学院での研修に対する姿勢で顕著だったのは、学びに対する謙虚さと貪欲さでした。常にどんなことから学ぼうとし、新しい知識を身につけるために言葉の壁を乗り越えようと必死でした。彼のモチベーションの高さは他の学生にも大きく影響し、我々職

員も彼から様々なことを学ばせていただきました。

ファンパンさんのような穏やかな性格の人には、自分の意見をダイレクトに表現する文化圏のクラスメートとの生活は苦労が多かったことと思います。それに対しては、彼は正面から立ち向かうより、むしろ自分の内面を見つめなおすことにエネルギーを向けていました。アジア学院での研修は自分自身をより向上させようとするきっかけになったのではないかと思えます。またそれこそが、学院が学生に期待する研修の成果そのものでもあるのです。

彼が卒業発表で語った夢は、ネットワークづくりでした。彼ならば、人々をつなぐその要になることができると思っています。



中野 真理子

（NGO地球の木理事 地球市民教育担当）

神奈川のNGO地球の木に所属。JVCへの支援の関係からラオスに数回渡航、そこに住む人々や風景に魅せられる。以降、ラオスの魅力を日本の学校などで伝えるために日々活動中。



■応援と交流をかねて、アジア学院も訪れた。

「JVCを通じてのラオスの村支援」という地球の木の支援形態は、どのように役立っているのかという実感が、会員にもうひとつ見えにくいところがある。そんな中で今回の「一人対しての直接支援」は、ファンパンさんという顔の見える存在を通して手ごたえのある成果を感じることができ、またラオスに対

する親近感も格段に深まった。彼の滞在中、できるだけ交流・応援の機会を持ちたいと考え、秋にメンバー七人でアジア学院に彼を訪ねた。彼の学びの一端をこの目で見、初めての稲刈りを体験し、改めてファンパンさんがここで学ぶことの意義を知った二日間であった。

帰国直前の報告会は、狭い事務所が一杯となるほど盛況だった。「アジア学院での経験は私の目を開かせてくれた。ありがとうございました」とファンパンさん。ラオスに戻ってからの夢を語る彼は以前と比べてより堂々と自信に溢れ、英語力もブレゼン力も、目を見張るほどの向上ぶりであった。彼を核としてさらに多くのリーダーが育っていくに違いない。「こういう支援っていいね」と誰からともなくうなずきあうのであった。

『周辺』にて見えること

総務担当 細野 純也



中学生の時に、現国の先生が授業中にこう言われていたことを思い出す。「私はヤクルトスワローズが好きなんですねぇ（当時すごく弱かった）。なぜかと考えてみると、弱い者が強い者に対して弱いなりに工夫して戦っていくところに、なんか口マンを感じるんですね」

昨年度、地元が一番近いサッカーのクラブチームがJ2リーグに降格した。要は負け続けたからである。「今日こそは」との思いを胸にスタジアムへと続く橋を渡り、重い足取

りで帰路につくことを繰り返してきた（年に数回程度だが）。

人生には良い日もあれば悪い日もある。負け試合を見続けて頭が麻痺してきたせいもあるが、「勝った負けたがすべてではない」と思えるようになってきた。だいたい、普通の仕事や日々の雑事を忘れて損得なしで阿鼻叫喚できるなんて、これほど贅沢なこともあまりない。

経済規模や高度に発達した社会システムを誇っていても、ことサッカーにおいては日本は周辺国、世界

の"へり"である。日本代表チームも含めてまだまだ発展途上だが、だからこそ面白い。勝利だけが求められるトップの立場と違って、現状を少しでも良くするために試行錯誤する姿と、それを見て個人的に「よし俺もがんばるか」と思えることは、「勝者だけがすべてを得る」わけではないということも教えてくれる。

気がつけば、自分もあの現国の先生と同じくらいの年齢になった。今年も開幕まであと少し、懊悩できる喜びの日々を待つことにしよう。

『ブルー・ゴールド 狙われた水の真実』

みるよむきく

監督：サム・ボzzo／アメリカ／90分



怒涛のような映画だ。世界各地で起こる「水」に関する問題、とりわけ政治的側面をもつ事例をたまたみかけるように見せていく。市民が清涼飲料水メーカーを訴えたアメリカでの裁判、国連に「水は人権であり公共信託財」である水憲章の採択を迫る運動、水道が民営化されたボリアでの抗議運動など。

「二十一世紀は水をめぐる争いの世紀になる」と言われて久しい。限りある資源をどう分配するのか、限らない富・権力への欲をどう分散するのか。有史以来のこの最適解が実現していない問いに対して、それでも現時点での困難さや未来への恐怖に目を向け、少しでも現状を良くしようと行動する人たちの姿を映し出す。

CSR、CRM、WIN・WIN

こうした映画を見て、何かしたい・自分はどうしたらいいんだろう、と思うような人は、その答えをすでに自分の中にもっているはずである。すべてを一度に良い方向に変えることは不可能だが、それは今にもやらない。あとは、それをやるかどうかだけの問題だ。この監督が、「この映画を作った」ように。

（総務担当 細野純也）

※注①：CRM = Cause Related Marketing

JVC は、現在 10 の国 / 地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部の35村で活動を行っている。3年間のプロジェクト第一期がまもなく終了するため、9～10月に活動評価を実施し、その結果の集計および分析を行なった。年間約150回の農業研修を実施し、約1万本の植林を実施するなど、当初の目的であった「より多くの人に参加できる活動」が実践できたことがわかった。また、さらに活動を深化、発展させるため、第二期のプロジェクト提案を準備している。

■環境教育

09年4月からシェムリアップ県東部の4つの小学校で実施している。現在、各小学校で自然観察用のピオトープづくりが進められている。また、各学校の図書館整備が終了したことから、今後は図書館司書の研修を実施する予定である。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供している。09年の活動のまとめと10年の活動計画の作成を行なった。オリエンテーションなどを頻繁に開催した結果、08年は674名だった年間利用者が、09年は1,005名へと増加した。来年度以降は、利用者からの要望に応じて土日の開館を検討している。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を開始した。自動車整備科に11月から新入生103名が加わり、1、2年生合計で学生数は189名となった。また、9月末で卒業した学生は、39名が就職、残りの6名は進学等で、全員の進路が決定した。(以上山崎)

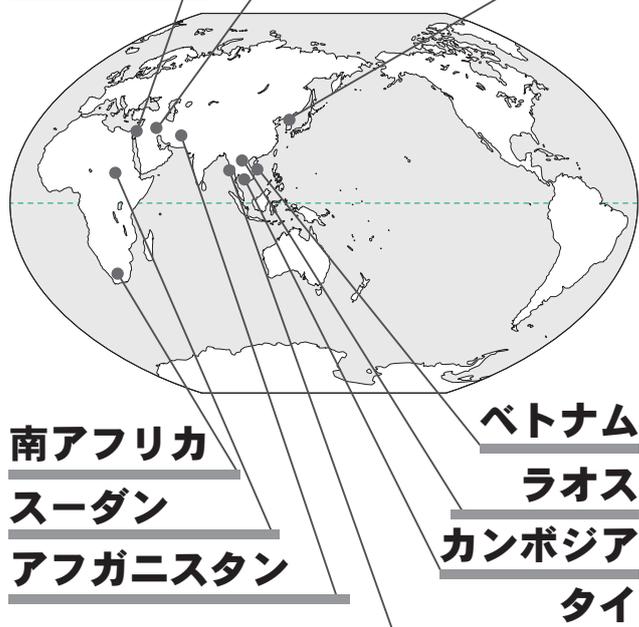


■技術学校の新入生。期待と不安を胸に故郷を離れて寮生活を開始する。

イラク

パレスチナ

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

11月から12月にかけて、乾季の家庭菜園のために4村で堆肥研修を実施。初めて堆肥作りを学ぶ村人が多く関心は総じて高かった。また、12月には3村で家畜ワクチン研修と実際の接種も行った。ワクチンについての正しい知識を説明し、接種の際は料金を徴収、今後の予防接種に使用できるよう、村の基金に収めた。この他、10月に実施したSRI(幼苗一本植え)スタディーツアーについて参加者より村内での報告があった。森林活動では、魚保護区の設置を1村で行なったが、同様に設置を希望している村が出ており話し合いを持った。また、先行して実施していた魚保護区を設置した村では、県や郡行政官を呼んで正式な魚保護地区開設式と学校での自然資源保護教育を行なった。



■カレンダーを手渡す森林担当と受け取るP村村長。

この他、12月から1月にかけて3村で土地森林に関する法律についての研修を行なった。土地森林についての村人の権利をわかりやすく伝えるための人形劇の準備を進めている。全体の活動としては、4村の新規活動村訪問や内2村で参加型調査を実施した。(平野)

ベトナム

■今後に向けて

日本や周辺国の農民たちとの相互の学びあいの機会を作れるよう、昨年度まで農業プロジェクトを展開してきたホアビン省などの農民との交流を模索している。(谷山)

スーダン

■車両整備を通じた難民帰還支援

06年以来、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との事業提携契約に基づき、「車両整備による難民帰還支援事業」と、元難



■ちょっとお洒落をして卒業式にのぞむ研修生たち。

民の若者を対象にした「整備士研修による帰還民定着支援事業」の二本柱による活動を実施してきたが、12月末をもって契約が満了。JVCによる整備工場運営も同時に終了し、工場はJVC事業開始以前の運営主であるスーダン教会評議会に返還された。1月からは「スーダン教会評議会整備工場」として再出発、独立採算を目指す。研修事業の継続も決定され、10名の若者が新しい作業着を身につけ研修を開始した。

3年半に及ぶ活動を通じてJVCが整備、修理したUNHCR車両は累計1,053台にのぼり、難民帰還事業に少なからず貢献できたと自負している。研修事業では、累計約40名の研修生教育（短期研修含む）を実施。第二期生の卒業式は12月19日に行なわれ、18名が修了証を手に入社会へと巣立っていった。うち女性1名を含む4名は、整備士としてスーダン教会評議会整備工場に正規採用された。

JVCは3月をもって本プロジェクトは終了する予定。新規プロジェクトのための調査を並行して実施予定である。

4月には総選挙、来年1月には南部スーダン独立の是非を問う住民投票が予定されている。投票方法を巡る統一政府（ハルツーム政府）と南部自治政府との対立が続いてきたが、昨年末に合意が成立。選挙、住民投票の実施が現実味を帯びてきた。（今井）

イラク

■地域社会再生のための活動支援

イラク北部キルクークで活動する地元NGOと協力し、多様な背景をもつ住民自身による対話活動の一環として、子どもたちの絵画共同制作ワークショップの計画を進めている。

■ガン・白血病医療支援

モスル、バグダッド、バスラなどの病院への支援を継続中。

■国内避難民支援

8月に行なったファルージャでの食料配給の事後モニタリング結果も含め、現在報告をとりまとめている。

■政策提言

JVCほか数団体が呼びかけ、日本政府にイラク政策の検証を求める「イラク戦争なんだったの!？」キャンペーンを開始。NGOによる共同要請書を政府に提出した。また、講演会や他団体との合同イベントなどを実施中。（以上谷山）

南アフリカ

■HIV/エイズ(リンボボ州)

農村でのHIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくり研修、患者や孤児へのケアを行なっている。11月25～12月1日に事業共同実施団体のシェア＝国際保健協力市民の会のタイ担当、西山美紀さんがHIV/エイズの専門家として南アフリカを訪問した。現地のパートナー団体、ポロシオンとLMCCの活動地を視察、アドバイス等をいただいた。1月18～22日には、在宅介護や給食センターのボランティア、HIV陽性者11名を対象に「雨水の有効活用」に関する研修をトレーナーの農園で宿泊形式で実施した。研修では雨を集めるために土地の傾斜を見て溝を掘る方法、簡単なタンクの作り方などを学んだ。



■研修を始めて6ヵ月でたくさんの野菜が採れるようになった。（ソウェトでの菜園研修）

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用した地域住民対象の菜園研修を実施している。11月23～27日に採種や収穫のタイミング、コンポストづくりに関する研修を実施、地域住民10名が参加した。また、これまでの研修を振り返った結果、活動を継続するためのポイントとして、混作や苗作りなどの基本的な技術があげられた。これを受けて、毎月畑の様子を確認するためのポイントをまとめたシートを作成することになった。6月から始めた本研修を通して、現在では約40種類の野菜と薬草が植えられている。参加者は自分で食べるだけでなく、学校の給食に寄付をしたり、地域の人に販売するなどできるようになっている。（以上渡辺）

タイ

■農村派遣研修

国際協力や自然環境保護に関心のある人を対象に、タイの農村に派遣し、「開発」や「NGOの役割」について村人と一緒に考え、学ぶ研修プログラムを実施している。これまで調べてきたタイ国内における有機農業や有機農産物を販売する市場の活動に関して、その現状や課題について報告した。（インターン宮田）



■津波慰霊祭にて。5年を迎えた津波被災地（バンガー県）。

■南タイでの在タイビルマ人支援

在タイビルマ人支援地を訪問し、現地NGOの医療支援活動を視察した。依然として救急的な医療行為が必要なケースが多いことが判明した。また、インターンの宮田がスマトラ島沖大地震による津波被災の慰霊祭に参加し、5年後の今も多くの問題が存在することがわかった。（下田）

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

ガザの幼稚園児約320名への栄養改善支援。西岸へブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布中。ハンユニスの栄養センターでは、栄養失調児のいる家庭に対して、夏以降は鮮度の高い食材が調達できずに中断していた持ち帰り用の乾燥食材の配布を再開した。



■巡回診療で薬を処方する保健指導員（右）。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療NGOと協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育、巡回診療活動を実施中。緊急救命・応急処置の出前授業を看護師を対象に実施。保健教育では、パレスチナでも新たな脅威となっている新型インフルエンザに関する講習を行なった。12月に東京担当・藤屋が出張、事業視察および評価会議を行なった。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍プロジェクトを支援。外国人ボランティア合宿でプレゼンテーションと販売を行なった。アユース＝仏教国際協力ネットワークの協力で、ベツレヘムのオリブ玉を使った平和念珠作りも新しいメンバーが加わり継続している。

■平和創造・平和構築

東西エルサレムで、女性たちのエンパワーメントを目指したプロジェクトを実施中。11月には東西の合同活動が行なわれ、12月には日本社会における女性の立場を紹介する機会をもった。女性たちが日本の例を通して自分たちの社会について考える機会となった。（以上福田・津高）

アフガニスタン

12月中旬から約3週間事業担当兼現地代表の長谷部、保健アドバイザーの西と事業担当補佐兼教育支援担当の谷山が現場に出張し、各活動を視察した。同時期にアフガニスタン出身で日本で働くレシャード医師を現地に招き、スタッフへの技術指導や地域医療活動への助言を受けた。



■現地スタッフと打合せするレシャード医師（中央）。

■女性と子供の健康改善のための地域保健事業

患者の病気の再発防止、および予防につなげるためのファミリー・ヘルス・ブック（＝カルテ）およびファミリー・カード（＝診察券）の作成のために、対象地域の全世帯の家族構成聞き取り調査を地域保健員などと協力して実施した。診療所等の視察を行なったレシャード医師からは全体的に良い評価をいただき、スタッフたちの励みとなった。同時に、薬の受渡し場所の改善やファミリー・ヘルス・ブックおよびカードの管理方法についての助言もいただいた。

■教育支援活動

今年度および来年度の活動の方向性を確認するために県の教育局長と面談。今年度中は引き続き研修を実施するが、来年度は、他NGOが実施する教員研修との重複を避けるために実施を見送る方向で検討を進めることになった。

■政策提言

活動地付近でのPRTに関して、バル・カシュコート、ゴシュタで、12月6日～13日にかけてHNIの診療所等でPRTが1,000名規模の診療・医薬品配布を行なった。JVCはANSOを通じてPRTに問題提起し、PRTから説明を受けた。HNIも別途PRTと会談を持ったとのこと。（以上長谷部）

調査研究・政策提言

■NGO外務省ODA政策定期協議会

12月4日にNGO外務省ODA政策協議会が、福岡市のNPO・ボランティア交流センター「あすみん」で開催され、JANICとして谷山が、ODA改革ネットとして高橋がJVCから参加。メコン河委員会が機能していない問題やカンボジアの土地収用問題について話し合われた。

■アフガニスタンの平和と復興を考えるトーク・イン

混迷を深めるアフガニスタンに対して5年間で50億ドルの支援を決めた鳩山政権。この新アフガン政策をめぐって与党議員、アカデミア、NGOをまじえて議論した。NGOとして高橋が、オバマ政権のアフガン戦略下での治安問題や汚職の現状を踏まえて総額プレッジの問題性を提起した。

■新JICA環境配慮ガイドライン有識者委員会

第31回（12月）、第32回（1月）の2回の委員会をもって、すべての議論が終了した。ガイドラインは4月に完成、7月に施行開始予定。（以上高橋）

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

12月に『南北コリアと日本のともだち展』の国内巡回展が、松山とさいたまで開催された。また、10月から京都・滋賀の10大学を巡っていた京都絵画展も無事終了した。



■さいたま展ではおなじみの伝統楽器の演奏。

今年で7回目となるさいたま展では、絵のほか韓国の絵本、仮面、朝鮮半島のコマやすごろくなどの伝統遊びが展示された。09年度の『ともだち展』の報告もあり、東京・平塚でのワークショップに参加した小学生2名が「かわいい平塚の小学生に出会えたことは、これまでで一番印象に残る良い体験だった」などと感想を述べた。さらに08年夏にピョンヤンを訪問された田島征三さんの講演会も行なわれ、多くの参加者があった。（寺西）

JVC国際協力コンサート2009

歌声ボランティアがつくる コンサート、昨年も盛会でした。

2009年12月5日大阪公演『メサイア』、12日に東京公演『クリスマス・オラトリオ』が無事に終了しました。来場者は前年比微減ではありますが、大阪公演692人（席数に対して84%）、東京公演1,424人（同75%）で、ともに盛況でした。今回は、パッハゆかりのドイツ・ライブツィヒにあるニコライ教会より、指揮者：ユルゲン・ヴォルフ氏が来日することに期待が寄せられました。演奏の合間に祈りを捧げる彼の指揮は、ダイナミックで、表現力豊かでした。リハーサルも時間を延長する熱の入れようで、団員の中には「スタミナをつけて練習にのぞもう」という人もいたほど。終演後、多くの合唱団員から「またユルゲンさんの指揮で歌いたい」と事務局に声が寄せられています。

また、当日はコンサート来場者に「JVC マンスリー募金」の参加を呼びかけ、東京ではワインのプレゼント（サッポロビール株式会社様提供）もあり、6名の方が新しい支援者となってくださいました。

来場者、約80名の当日ボランティア（大阪・東京）、協賛企業、出演者、合唱団の皆さま、本当にありがとうございました。聴く人、歌う人、裏方になる人、経費を支援する人、どこがかけても成立しない奇跡の音楽公演です。これからもどうぞご参加くださいますようお願いいたします。（コンサート事務局 石川 朋子）



■ダイナミックな指揮！ ユルゲン・ヴォルフ氏。

国内ひろば

JVC network

合唱団員募集のお知らせ

現在、2010年東京公演『メサイア』に出演していただく合唱団員を募集しています。ご関心ある方、事務局へお問い合わせください。

→メール：concert@ngo-jvc.net、TEL：03-3836-4108

JVC国際協力カレンダー2010/スマイル年賀状

卓上カレンダーが大好評！ 1,930万円の収益になりました。

6年ぶりに、写真家倉洋海さんのご協力のもと制作した JVC 国際協力カレンダー 2010『子どもたちの大地』。表紙の子どもの写真が印象的で、好評をいただきました。特に卓上カレンダーはデザインを一新。表裏両面に写真を入れ、卓上においても、壁に掛けてもご利用いただけるようにしました。この卓上カレンダーの売上は、昨年の1.5倍、6,200部。予想もなかった注文に、途中で足りなくなって増刷することになりました。

また、数量限定で販売を始めた「JVC スマイル年賀状」。12月に入ってからのお知らせでしたが、200人以上の方々から、計7,000枚ほどのご注文をいただきました。これをスタートに、次回の年賀状はいさつ文・お名前を入れた「注文年賀状印刷」を始めたいと現在計画中です。

皆さまのお手元にカレンダーや年賀状をお届けできるのは、会員とボランティアの方々のご協力あってのことです。特に昨年は、責任感ある熟年、アラ還（アラウンド還暦！）メンバーの皆さんとスムーズに受注発送作業を進めることができました。カレンダーをご注文くださる方、事務を担ってくださる方、多くの皆さまのおかげで、今年も大きな活動費を得ることができました。ありがとうございました。（カレンダー事務局 荻野洋子）



■荻野とアラ還ボランティアの面々。

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVCへの募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

11月計 970,799 円
12月計 1,368,120 円

	11月	12月
無指定	166,306円	426,843円
タイ	0円	0円
カンボジア	14,550円	118,075円
ラオス	25,155円	479,264円
ベトナム	10,605円	0円
南アフリカ	150,000円	3,500円
パレスチナ	267,068円	178,666円
アフガニスタン	95,000円	303,382円
コリア	0円	1,000円
イラク	242,115円	66,000円
スーダン	0円	500円

※上表には「冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

11月計 45,000 円 /12 件
12月計 187,446 円 /27 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

11月計 1,933,350 円 /1,638 件
12月計 1,974,550 円 /1,662 件

編集後記

昨年栃木県に海外研修に来ていたラオス人スタッフのフンパン(8ページ参照)。研修後、彼が研修で実践していた「内観」の話を聞きました。恥ずかしい話ですが初耳でしたので、調べてみると吉本伊信氏の内観法に該当するみたいですね。他者を通じて自身の内側を見つめなおす心理療法、とのこと。そういえば最近自分を振り返る機会がなかったな…と反省させられました。

関西地域の皆さんとの出会いに感謝!

大阪・ワンワールドフェスティバルに出展しました

会員担当 寺西澄子



■ ブースで来場者と話す寺西。

大阪で毎年恒例となっているワンワールドフェスティバルが、今年も2月6、7日の二日間にかけて、大阪国際交流センターで開催されました。久々の寒波が日本全国を覆った初日は、大阪でも冷たい風が吹いて一時は雪もちらつくお天気

でしたが、場内はたくさんの来場者の熱気であふれていました。

JVCではブースでの活動紹介やクラフト販売のほか、パレスチナ事業担当の藤屋が「ガザの今を考える」と題した講演をおこない、48名の参加がありました。イスラエルによるガザ空爆から一年、最新映像を交えながらの講演に参加者は熱心にメモをとるなどして聞き入っていました。また、コリア事業でおこなっている『南北コリアと日本のともだち展』の作品を展示し、多くの方に関心を持って見ていただくことができました。そのほか、NGO相談員(外務省から委託されている制度)として佐伯が2日間にわたり、国際協力やNGOにまつわる相談コーナーを受け持ちました。



■ 関西の人には西の言葉がやはり効果的? 気さくに声をかける嶋理事。

ブースには、パレスチナ刺繍製品やカレンダーを楽しみにして下さっている方や、ラオスの井戸支援をきっかけに二十数年にわたってご支援くださっている方、この機会にブースでの販売や報告会でのお手伝いをしたいと申し出て下さった方などがかわるがわる立ち寄って下さり、顔をあわせてお話することができました。設営や販売にご協力くださった皆さん、本当にありがとうございました。

国内の会員や支援者の方々に、海外での活動や出来事をタイムリーにお届けして身近に感じていただくことは、事務局としても長年の課題です。東京以外の地域でのJVC主催イベントがまだまだ少ないなかで、大阪在住の嶋理事とも「普段から国内でもっと有機的につながっていくにはどうしたらよいか」との話になりましたが、長年にわたってJVCを見守り続けて下さっている方々との出会いに、改めて感謝した二日間でした。

JVCウェブサイト 会員専用ページパスワード(2010年3月~4月):

4HGxv2XyLe

JVCウェブサイトの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

90

Sudan



ひく コーヒー豆を挽く

なべやフライパンで炒ったコーヒー豆を
下に置いた器に入れてたたいてつぶし、すりこぎと同じ要領で粉状にする。
それを別の器に入れて水を注いで沸騰させ、粉を沈殿させてその上澄みを飲む。
エチオピアをはじめ、アフリカ各国でよく見られるコーヒーの飲み方だ。
写真は紛争後の村で平和を祝うセレモニーの時のものだが、
普段でもこうして飲んでいるようだ。
(スーダン中央部、南コルドファン州にて撮影)

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉や、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。
入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション(説明会)にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。

※本誌は、イーパーツ寄贈プログラム「Adobeソフトで市民活動も、クリエイティブ力&デザイン力UP!」提供のAdobe Creative Suite 3 Design Premiumで作成いたしました。



会員数(2月3日現在) 合計 1,330名
(正会員 646名、賛助会員 684名)